

世紀末小唄のお稽古

三雲 謙

水無月。師匠が唄われるのを初めて聞いたのは、今年の六月。香川の四国村「おもかげ塾」でした。ゲストで招かれた師匠は、松岡正剛氏の説明にあわせ、日本の唄の歴史を演奏仕分けて下さいました。それも凄いいことではありますが、ううまぐれに聞こえる師匠の声と三味線の音色は、解け合いながら彩を持ち透き通り、心の奥へ奥へと浸み込み、涼し気な流れをつくりだしてゆきました。

八月八日、大倉正之助さん主宰の五流五番能を鑑にこられた師匠に再びお目にかかりました。その時はすでに高野さんも入門されていたのですが、師匠に「三味線の構え方がいい」などとおだてられ、白金台にかようなように

新人紹介

今回は、美紗の会の大型新人四人にインタビュー。場所は、お稽古場。一階の葡萄の樹。

一日目はまず高野さん、九月のゆかた会の折、今風のヘアスタイルに浴衣をきっちりとした涼しげに着こなしたチャームミンガな女性、それが高野さん。オトグラブを扱ってお仕事だとか。

おそらく日本では、彼女一人しかいないらしい。オトグラブとは、歴史上の人物、芸術家の直筆の手紙、日記等、文書のことで（私にはこの程度の知識しかありませんが）

その買い付け紹介等のお仕事で、ロンドン・パリ・ニューヨークを中心に活躍されているキャリアウーマンです。師匠との出会いは六月、四国村の「おもかげ塾」でした。師匠の唄と三味線にすっかり魅せられて、即日弟子入りということになりました。幼い日、おばあ様が弾く三味線の音が蘇って来て、とても不思議な気持ちになりました。身体がどこかにしみ込んでいたものが目覚めてふき出した様な感覚でしたとのこと。お稽古を始めてみると、今まで使っていなかった身体の

細胞が動き出し、今までに味わったことのない未知の快感だったそうです。今はお稽古が楽しくて、これからも眠っている細胞を活性化させ、この気持ちの良さをのばしてゆきたいと。二日目はいつも元気な山中山さん。彼女は私と同様、師匠の中高の同級生です。高校時代は正義感強く、発言力もあり、先生をやり込めることもしばしば！彼女は、高校時代気が弱く、私女の前では出来るだけ目立たない様にしてきた記憶があります。時が経ち、今や彼女は家事をバリバリこなす良妻賢母が（私にはちょっと意外でしたネ）彼女の弟子入りのきっかけは習いたいというより、師匠の役に立つのなら、というボ

岩室温泉高島屋へ遠征。田中優子さん主宰の「粋」をテーマにした「日本芸能の夕べ」でした。三百年近い歴史を持つひなびた旅館で聞く師匠の三味線と唄。まさに「粋」なひとときでした。なぜか師匠、傳田さんをふくむ十数人で祇園に遊ぶ。かげま茶屋風の少し妖し気なお座敷で「お伊勢参り」を唄うことに。それは歴史でした。しかし師匠が「秋の夜」を弾き唄いはじめると、座の一同はもとより、お店全体が昔の風情をおもいだす。ついには、常磐津の師匠という御亭主もたまらず登場し、三味線のとっておきを一曲披露してくださいました。というように、「世紀末唄のお稽古」は「日本中を行ったり、来たらずに進んでいきます。ならば、やって来る世紀にも、「シヨングーイナ」。

ランテイア精神から。ところが、お稽古を始めた今、こんな楽しい習い事があつたのかと思つているそうです。三味線の音が心地良く、声を出すことも気持ち良く、やっぱり日本人だな、という気分だそうです。フアイトいっぱいの山中さん、これから一生懸命お稽古して十年、二十年後には、お食事でも釣らなくても聞かされてから長生を祈りたい、だから長生きして、と師匠に言ったとか。私達は、同い年だから大丈夫！お互いに長生きしてお稽古に精進しましょうネ。

三日目は三雲さん。お勤め先は「電力中央研究所」。研究課題は「経済社会展覧」。何とも難しく堅いお仕事の様です。

弟子入りのきっかけは、三雲さん御自身が今回のたより書いてらっしゃいますが、おだてられてその気になりました、おだてに乗りやすいのも才能かな、と低音で静かに話される三雲さん。三味線と唄と両方のお稽古をなさっていますが、今は唄の詞にとっても興味があります。

そしてその堅いお仕事の意味深さ、三味線との掛け合い、そしてその奥にあるものを追いかけるうちに深みにはまっていきそうで怖い……こんな、独身のいい男が小唄の深みにはまるころなんて、チョイト見てみたいですね。

伊勢さんは三雲さんと同じ日にインタビュー！二人の会話からどうも同期のライバルという仲らしく、お互いに習っている唄にさぐりを入れていきます。どうも廻りが永遠のライバルと煽っている様ですが、伊

虹の会のお知らせ

平成十二年十二月十二日(火)六時半より内幸町ホールで、第三回「虹の会」が開催される。今回は「時雨降る夜の逢うは別れ」と題し、花柳千寿文の踊り・西松布唄の唄と三絃・ゲストに田中優子氏を招いて、日本の様式美を美しくしつとりと味わっていただきたいと思ひます。皆様のお越しをお待ちいたしております。

勢さんは女子美の助教授というお仕事、照沼さん、日比野さんとの交流の中から師匠との出会いがありました。前々から三絃には潜在的な興味があつた伊勢さん、浅草で友人達の遊びの中で、羨望で友人の三味線の音を間近に聞いたことでもうしても三味線がほしくなつたとか。弟子入りして三味線だけ、と思つていたのに唄も言われエエツ。それでもお稽古を始めると三味線の音と唄の入り組んだ掛け合いが難しく、又そこがおもしろくて、とおっしゃる。My三味線持参の熱心なお稽古、学校の研究室も、車の中も、師匠の唄と三味線の音が流れている様子。練習不足の言い訳を毎回さがしている私にとつて頭が下がります。美大の先生というより、学生さんの様な伊勢さん。三味線をかかえている姿が不思議と絵になつてらっしゃいました。

今回四人の方達にインタビューをしておどろいたのは、四人供お稽古しつて気持ちが良い、と言われたこと。こんなに小唄を愛する方達が加わつて美紗の会もますます楽しくなつていきそうです。(大久保 記)

端唄	粋な浮世	花柳千寿文
	早や告ぐる	西松布唄
	いつしかに	
ちよつと粋なお話		田中優子
歌	枯野	西松布唄
	更けて逢う夜	
上方唄	柳やなぎ	花柳千寿文
長唄	初しぐれ	西松布唄
		寺師美智子
語り・踊り・演奏による		
創作曲	幻のお三重	
	泉鏡花「歌行燈」	
	構成演出 三枝孝榮	
	照明 高木しづみ	
	作詞 田中優子	
	作曲 西松布唄	
	振付 花柳千寿文	
立方		花柳千寿文
唄		西松布唄
笛		寺師美智子
語り		田中優子
仕舞		小野里禮子
地謡		小野里 修